

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 5号

12月24日(火)

【福井】

北陸高等学校

不機嫌な教室 2019

スクールカースト最底辺にいるクルミは、上位のミキや男子生徒たちから受けている嫌がらせの延長として、ミスコンに出場することになってしまう。ところがミスコン出場をきっかけにクラスのスクールカーストが揺らいでいく。

高さがある舞台セットでカーストの上下の違いをわかりやすく表現できていた。また、物語の舞台は学校の教室だが、イスの代わりに白い箱を使うなど抽象的な舞台セットを用いることで、学校以外の一般の社会における上下関係をも象徴しているように感じられた。高さや色がバラバラな板を並べた壁は、個性豊かな生徒たちが教室という空間に押し込められ、周囲に同調することを強制される窮屈な様子を表しているのではないかという意見もあった。

音響は迫力があり雰囲気盛り上がり効果的であったものの、やや大きすぎてセリフが聞き取りづらい箇所があったところが残念だった。アカネの恋人ショウの声に関して、マイクを使う必要性はなかったのではないかという意見と、ミキにとっては自分からアカネを奪う「天の声」のように捉えられたのではないかという意見も出た。

全体的に平坦で独特なテンポで物語が展開することで、リアルな日常を描きつつも教室に漂う『不機嫌』な気分をうまく伝え、登場人物たちのモヤモヤを観客も共有できた。

ミキが断罪されたシーンについては、スカッとしたという人もいれば、カースト上位にいる人に好かれようと必死になり、それによって自分自身もカースト上位に上がろうとするミキに同情してスカッとできなかったという人もいた。ミキの場所にクルミが座ったことから、逆にクルミの場所にミキが座ると予想していた人もいたが、ミキの存在が完全に消されていたラストにゾツとするような恐ろしさを感じた。また、ミキ側だったサトルとキョウヘイが、ミキが断罪された時に手の平を返したようにクルミ側に立ったことで、簡単に切ることができる上辺だけの関係の脆さを改めて感じた。

アカネの人物像についても意見が分かれ、「悪意のない善意の塊」と捉えた人もいれば、「何を考えているか(どこまで気づいているか)よくわからない人物」「無邪気さを装ってはいるが一番怖い」と捉えた人もいた。最後の「7人だっけ?」「6人だよ」「勘違いかww」というやり取りからは、無自覚な人間が最もタチが悪いという理由からアカネの恐ろしさを指摘する意見も出た。

この劇を通して、「カースト」自体は立場や面子が入れ替わるだけでなく、私たち自身がそれに囚われている限り、どこにでも存在するものだという現実を強く突きつけられた。